

ロート製薬の知財戦略分析

現状の知財戦略概要

知財戦略の基本方針と体制: ロート製薬は「他者の知財権の尊重」「自社技術・ブランド価値向上のための知財獲得」「オープンイノベーション促進」の3本柱を基本方針として知的財産活動を展開しています¹。研究開発の成果や商品ブランド（ネーミング・デザイン）を**特許・意匠・商標**などで権利化し、自社技術資産やブランドを保護するとともに、グループ全体でその知財を活用して事業推進に繋げる体制です²。社内には**技術・知財アライアンス推進部**など専門部署があり、各事業部門（コンシューマー事業、ファインケミカル事業等）と連携して知財創造・権利化・活用・紛争対応まで担っています³⁴。このように**事業戦略と知財戦略の統合**を図り、知財を企業価値向上の重要な経営資源として位置付けています⁵。

特許出願の量的動向: ロート製薬の**年間特許出願公開件数**はここ数年おおむね**年間70～90件台**で推移しており、2010年代後半から近年にかけて増加傾向が見られます（例: 2017年76件 → 2018年96件）⁶。直近では2023年に91件の出願公開があり活発な水準です⁷（2022年は73件）。特許登録件数も毎年30～50件程度取得しています⁷。以下に近年の特許出願公開件数の推移をまとめます。

年度	出願公開件数	特許登録件数
2017年	76件 ⁶	48件（参考）
2018年	96件 ⁶	41件 ⁶
2019年	73件 ⁸	43件 ⁸
2020年	83件 ⁹	30件 ⁹
2021年	85件 ⁸	41件 ⁸
2022年	73件 ⁸	43件 ⁸
2023年	91件 ⁷	54件 ⁷

こうした出願件数の推移は、**事業ポートフォリオの変革に伴い知財権の注力分野も変化**していることを示唆しています。実際、ロート製薬では**研究開発の強化**を背景に「技術力と商品力を高め競争力の源泉としてきた結果、有用性の高い特許を多数保有するに至っている」と分析しており¹⁰、知財投資検討会での事例報告でも**事業ポートフォリオに応じた特許出願件数の増減**が紹介されています¹¹。知財戦略の情報発信にも力を入れており、統合報告書でブランド競争力の一環として知財・無形資産を分析するなど、投資家からも知財に関する説明要請が増えている状況です¹²。

重点技術領域と知財ポートフォリオ: 伝統的にロート製薬は**目薬（アイケア）**や**スキンケア**などセルフケア領域で強みを持ち、多くの特許・意匠・商標を取得してきました¹³。例えば、洗眼薬「イーザーカップ®」の容器構造では**特許第6095987号**と**意匠登録**を取得し、模倣品対策と製品差別化に成功しています¹⁴。また「ロート製薬」「メンソレータム」「肌ラボ」など主要ブランドを国内外で商標登録しブランド価値向上にも努めています¹⁵。技術面では**処方技術や剤形の改良特許**が多く、点眼剤の処方安定化や使用感向上に関する特許、スキンケア成分（ビタミンC誘導体やヒアルロン酸等）に関する特許群を蓄積しています¹⁶¹⁷。これら既存事業領域の知財に加え、現在ロート製薬は**再生医療**や**医療用眼科薬**といったメディカル領域にも事業拡大しており、それに伴い特許出願の技術分野も広がっています（後述）。知財部門ではこの**幅広**

いポートフォリオを最適に構築・管理し、将来の競争力強化に繋げるよう戦略的に取り組んでいるといえます¹⁸。実際、同社は「知的財産を重要な経営資源と位置づけ、新たな価値創出と持続的成長のためグローバルな知財力強化に取り組んでいる」と宣言しており⁵、知財を攻めの武器・利益創出ツールとして積極活用する姿勢です¹⁹¹⁴。一方で**休眠特許の存在**（事業化に至らない特許の蓄積）も課題として指摘されており、今後は**知財の有効活用**（不要特許のライセンスアウト等）や**社内人材育成**による体制強化が期待されています²⁰²¹。

メディカル分野における知財出願の特徴と事例

再生医療分野の特許出願： ロート製薬は2013年に再生医療研究部門を立ち上げて以降、間葉系幹細胞（MSC）を用いた再生医療等製品の開発に注力しています²²。これに関連して**細胞治療や培養技術に関する特許出願**がみられます。事例として、「**脂肪組織由来間質細胞を含む虚血性疾患治療剤およびその製造方法**」という発明の特許が2018年に公開されており、他家由来MSCを用いた心疾患治療の製剤と製造法に関する出願と考えられます²³。またMSC培養技術に関して、動物由来成分を含まない無血清培地の開発²⁴や細胞外マトリックス産生促進組成物²⁵など、**プラットフォーム技術の特許化**も進めています。実際、再生医療支援サービス（他機関からのMSC培養受託など）の事業化に合わせ、**培養プロセスや培地組成に関する特許**を取得・出願していると推測されます。こうした基盤技術の知財確保により、ロート製薬は再生医療分野での優位性構築を図っています。

具体的な再生医療製品としては、虚血性心不全を対象にした他家MSC製剤「ADR-002K」の臨床開発を進めており²⁶、その製造方法や用途特許を出願している可能性があります。同様に、グループ会社化した**インターステム株式会社**（軟骨再生医療ベンチャー）の技術についても、**自家培養軟骨シート**等の特許出願が行われていると考えられます²⁷。再生医療では製品そのもの（生細胞等）の特許だけでなく、**細胞の加工方法、投与デバイス、培養装置**など周辺技術も含めた知財網を構築することが重要であり、ロート製薬も関連領域で幅広く知財を押さえているとみられます。

医療用眼科薬分野の特許出願： もともとOTC目薬で多数の知財を保有するロート製薬ですが、近年は**医療用（処方用）眼科薬**への参入に伴い、**新規有効成分や処方に関する特許出願**が増えています。例えば近視進行抑制など**視機能回復を目的とした処方**の出願例として、「**視覚機能の再活性化用眼科組成物**」が2018年に公開されています²⁸。さらに2020年代には**ドライアイやアレルギー、緑内障、近視抑制**など様々な適応症向けの処方特許が出願されており、実際に「**刺激感が抑制された眼科組成物**」²⁹や「**オロパタジン含有水性組成物**」（アレルギー用点眼）³⁰、「**緑内障・高眼圧症治療用組成物**」等が公開公報で確認できます。これらは同社が開発中のパイプライン医薬（例えば**TLM-003**と呼ばれる近視治療薬候補や、緑内障治療剤など）に対応した特許と考えられます。実際、ロート製薬は2019年に**デ・ウエスタン・セラピテクス研究所（DWTI）**から眼科用治療薬候補（DW-1001）の日本における開発・販売権をライセンス導入しており³¹、その候補物質に関する用途特許や処方特許も自社名義で出願している可能性があります。このように、**医療用眼科領域ではOTCで培った処方改良技術を応用しつつ、新規薬効を持つ化合物やドラッグデリバリー技術の特許取得に乗り出しています**。

その他の医療関連知財： ロート製薬は再生医療・眼科以外にも、**創薬や診断**の分野で知財活動を始めています。例えば、2021年にはベンチャー企業バイオミメティクス・シンパシーズ社が発見した**COVID-19治療薬候補（キノロン系化合物）**についてライセンス契約を締結し³²、この化合物の特許（ACE2およびTMPRSS2発現抑制剤）を取得しています³²³³。さらにその共同研究から着想を得て、MSC研究の知見を創薬標的発見に繋げる新組織「RB*」を発足させるなど³²³⁴、**創薬プラットフォーム構築**にも知財展開を図っています。加えて、音声診断AIベンチャーへの出資や提携（PST株式会社との音声バイオマーカー技術提携）など、デジタルヘルス領域でも特許取得済み技術の導入・活用を進めており³⁵、医療・ヘルスケア分野での知財ポートフォリオ拡充を図っている状況です。

総じて、メディカル分野でのロート製薬の知財出願は**(1)再生医療等のバイオテクノロジー関連（細胞・培養・デバイス）**と**(2)医療用医薬品関連（新規有効成分・処方・剤形）**が二本柱となっており、それぞれ既存

事業の延長線上にある強み（無菌製剤技術、処方設計力）を活かしつつ、新たな技術領域の知財を積極的に押さえている点が特徴です。

外部技術との連携における知財取扱い（共同研究・M&A・ライセンス）

オープンイノベーション戦略： ロート製薬は自社のみならず**外部の技術・アイデアとの連携**によりイノベーション創出を図るオープンイノベーション戦略を掲げています³⁶。その一環として**自社保有特許のライセンス提供**や**共同研究契約**を積極化しています。公式サイトでも「保有する特許技術のライセンス活動」を開始し、ウェルビーイングな世界の実現に向け共創パートナーを募集していると述べています³⁷。実際、ライセンス可能な特許例として「高い美白効果が期待できるアスタキサンチン×ビタミンE配合化粧品」「肌にやさしいクレンジング技術（ミセラウォーター）」等の複数の特許を公開し、外部への技術移転を促しています³⁸。これは、自社で活用しきれない**休眠特許**にも光を当て外部で事業化してもらう狙いであり、社会への還元と自社収益化（ライセンス収入）双方を目指す取り組みです³⁹⁴⁰。

共同研究・アライアンス： 大学や他企業との共同研究による知財創出にも注力しています。再生医療分野では**大学病院との共同臨床研究**を複数実施しており⁴¹、研究段階から知財契約を結んで成果の取り扱いを明確化しています。例えば2021年には前述のバイオメテックス社との協業で、新組織「RB*（リジェネラティブバイオプラス）」を立ち上げ³²、両社で知財を共有しつつ新薬開発を進める枠組みを構築しました。また2019年には創薬ベンチャーDWTIから緑内障領域の化合物ライセンスを受けると同時に、日本革新創薬株式会社（ライセンス管理会社）へ共同出資するスキームを取り、開発成果や特許権益を明確にしたケースもあります³¹⁴²。こうした**ジョイントベンチャー型の知財シェア**も行い、外部技術を取り込みつつ自社の権利も確保するバランスを取っています。

M&Aによる知財獲得と活用： ロート製薬は近年、将来の成長分野に関連する企業買収・出資を活発化しており、それに伴う知財の取扱いも重要なテーマとなっています。例えば**再生医療領域**では、2021年に軟骨再生ベンチャーの**インターシステム株式会社**をグループ化し、その有する軟骨再生技術や関連特許を自社ポートフォリオに取り込みました²⁷。また**グローバル展開**を睨み、2023～2024年にかけて**海外企業の買収**も実施しています。シンガポールの漢方薬メーカー**ユーヤンサン社（EYS）**を約880億円で買収しアジア伝統医療のブランド・製品を取得したケースや⁴³、オーストリアの製薬企業**モノケムファーム社（Mono社）**の株式51%を取得して欧州拠点と製造技術を獲得したケース⁴⁴が典型です。これらM&Aでは、買収先企業の持つ**特許・商標など知的財産の評価と承継**が重要なデューデリジェンス項目となりました。買収後は、海外市場におけるこれらブランド・特許をロート製薬が活用できるよう**知財管理体制の国際統合**を進めていると考えられます⁴⁵⁵。例えばユーヤンサン社の商標・生薬製造ノウハウ、Mono社の医療機器特許などは、ロート製薬の既存技術と組み合わせることでシナジーを生み出す可能性があり、知財部門が中心となってその統合的活用戦略を策定しているでしょう。

ライセンスイン・ライセンスアウト動向： 以上のように、ロート製薬は**ライセンスイン（外部からの技術導入）**と**ライセンスアウト（自社技術供与）**を両面で展開しています。ライセンスインの代表例としては前述の眼科治療薬候補（DW-1001）の導入³¹やCOVID-19治療薬候補の導入³²が挙げられ、いずれも**自社に不足する革新的シーズを外部から取得**し、自社開発力・販売力と組み合わせる戦略です。この際、契約上は導入技術に関する特許・試験データ等を独占的に実施できる権利を確保し、将来的な**特許出願もロート製薬名義で行う形**を取っています（※DWTI案件では詳細非開示³¹）。一方ライセンスアウトでは、上述のように**自社化粧品特許の公開ライブラリー化**や、再生医療技術での他機関への技術移転（例：他社へのMSC培養手法指導）などを進めています⁴⁰。実際、ロート製薬は「各部門のメンバーが知財を意識するようになり、社内から知財部門への問い合わせが増加した」と述べており¹²、新製品ローンチや他社協業の場面で知財部門が早期から関与し**契約・権利処理**を行う機会が増えています。知財部門自体が**ビジネスアライアンスの交渉窓口**として機能し、契約書中の知財条項の詰めや、共同出願時の権利配分調整など専門的役割を果たしているものと考えられます。

以上のように、ロート製薬の知財戦略はクローズドに囲い込むだけでなく「**自前主義に陥らない開かれた知財戦略**」が特徴です。他社との協働によって技術革新を加速させつつ、自社に有利な形で知財権を確保・活用するという**攻めと守りのバランス**を追求しています。

国内外の競合と比較した知財戦略上の強み・弱み

競合他社の状況：ロート製薬が踏み込んでいる**再生医療**や**バイオ医薬**の分野では、国内では**富士フイルム**や**アステラス製薬**といった大手企業が先行しています。富士フイルムは再生医療ベンチャー買収（ジャパン・ティッシュエンジニアリング等）やiPS細胞技術への投資で知られ、アステラス製薬も海外バイオ企業の買収（米Ocata社のiPS技術等）により強力な知財ポートフォリオを構築しています。こうした**潤沢な資金と強力な知財網**を持つ競合に対し、ロート製薬は規模で劣る分、不利な「特許戦争」に巻き込まれるリスクや技術革新で後手に回るリスクを常に抱えています⁴⁶。実際、富士フイルムやアステラスは関連特許を世界規模で多数出願・保有しており、ロート製薬が今後グローバル展開する際には**FTO（他社特許の侵害回避）**の面で戦略的対応が必要になるでしょう。

他方、**眼科薬分野**における競合を見ると、国内では**参天製薬**が処方箋薬で高い市場シェアと豊富な特許を持ち、海外では**ノバルティス（アルコン）**や**アラガン**（現アッヴィ傘下）などがデバイス含め幅広い知財を所有しています。こうした企業に比べ、ロート製薬はOTC市場ではトップクラスながら、処方薬市場の歴史は浅いため**知財ポートフォリオの厚み**で見劣りする部分もあります。また、参天製薬は学術的な創薬研究にも投資して画期的新薬特許を出していますが、ロート製薬の眼科領域知財はどちらかと言えば**改良型・処方薬**が中心で、基礎研究に裏付けられた画期物質特許は今後の課題と言えます。

ロート製薬の強み（知財面）：それでもロート製薬には独自の強みがあります。第一に**眼科領域での知財総合力**です。同社の特許群は質・量ともに高く評価されており、「**眼科薬関連技術 特許総合ランキング**」で第**1位**に位置付けられました⁴⁷。これは1993年～2022年の特許を対象とした分析で、**ファイザー**などグローバル大手を凌ぐスコアを獲得しています⁴⁸。この背景には、長年培った点眼剤処方技術や独自の先進研究（例えばロート独自の近視抑制コンセプト等）があり、新規性・独自性の高い発明を数多く生み出してきたことが要因とされています⁴⁷。つまり「**伝統的アイケア企業×革新的技術**」の組み合わせが知財面でも競争優位となっているのです。

第二に、**異分野融合の知財活用力**が挙げられます。ロート製薬は医薬品だけでなく化粧品・食品まで扱う多角ヘルスケア企業であり、その中で培われた**知財ミックス戦略**があります。例えば技術面の特許で製品機能を守りつつ、デザインの意匠権でブランド魅力も高め、商標で顧客認知を守るといった**多層防御**を実践しています⁴⁹⁵⁰。実際、同社知財部門の宮崎氏は「特許は技術を、商標はブランドを守るものだが、意匠も技術・ブランド双方に有用な知財だ」と述べており、デザイン保護を含めた知財活用が社内に浸透しているといえます⁴⁹。このような**包括的ブランディング知財戦略**は、機能・訴求・意匠が一体となるコンシューマー製品で威力を発揮し、模倣品に対する強みとなっています。競合の中には単一カテゴリに特化した企業も多く、ロート製薬のように異なるカテゴリの知見を融合させて知財展開できる点は差別化要因です。

第三に、**機動性と提携力**です。大企業に比べ規模の小さいロート製薬は、意思決定の速さや外部との柔軟なネットワーク構築で勝負しています。知財面でも、有望技術の発掘から契約締結・開発着手までのスピード感は強みでしょう。実例としてCOVID-19治療薬候補の導入では、発見から比較的早期にライセンス契約を結び共同研究を始動させています³²。また休眠特許の社外提供など、**自社技術を囲い込まない開放的姿勢**も外部パートナーから好意的に受け止められています。これは競合他社にはあまり見られないアプローチで、共創型の知財戦略はロート製薬の文化的強みと言えます。

ロート製薬の弱み・課題（知財面）：一方で課題もあります。まず**リソース規模**の違いによる弱みです。先端医薬の分野では、特許出願や係争にかかる費用・人員も莫大です。ロート製薬の知財部門規模は大手に比べれば小さく、国際的な特許ポートフォリオ管理や係争対応では限界があるかもしれません。この点、競合の富士フイルムや製薬大手は専門人材を多数擁し特許プールや訴訟戦略にも習熟しています。ロート製薬も今

後知財人材の育成・増強や海外拠点での知財要員配置を計画していますが⁵¹⁵²、しばらくは組織力に差があるでしょう。

次に**バイオ分野特有の知財経験**の不足です。再生医療などでは特許だけでなく**データ包護期間**や**ノウハウ秘匿**など多角的な知財戦略が必要ですが、ロート製薬は伝統的に医薬部外品・OTC中心であったため、こうした**レギュラトリーサイエンス面の知財戦略**は新たなチャレンジです。またバイオ特許の世界では、特許クレームの権利範囲や有効性を巡って複雑な係争が起こりがちですが、同社には過去大きな特許係争の事例が少ないため**訴訟リスクへの経験値**も限定的と考えられます。実際、有価証券報告書でも「知財権の適切な保護ができない場合や第三者からの侵害訴訟リスク」が業績へのリスク要因とされています⁵³。これは言い換えれば、まだ特許係争に本格対応した実績が乏しいことを示唆しています。

さらに、**グローバル特許出願の展開**も課題です。同社は国内特許は多いものの、海外での特許取得件数ランキングでは上位に出てきません（国内ランキング第271位⁵⁴に対し、例えば米国出願は限られた数と思われる）。グローバル市場で戦うには主要国での権利化が不可欠であり、今後その対応が遅れると模倣やジェネリック参入を許すリスクがあります。

最後に**知財の事業統合力**です。前述のように知財戦略は事業戦略とかなり統合されつつありますが、完全にインテグレーションされた段階（企業文化を変革するレベル）には達していないとの指摘もあります⁵⁵。すなわち経営陣や全社レベルでの知財マインド向上は進んでいるものの、知財が経営判断の中心に据えられるまでには至っていない可能性があります。この点、知財を経営中枢に位置付ける企業（例えばトヨタなど他業界の知財先進企業）との比較では、まだ改善の余地があるでしょう。

メディカル事業拡大に伴う今後の知財戦略の展望

ロート製薬が進めるメディカル事業への本格拡大（2030年以降の再生医療製品や医療用眼科薬を柱とする戦略⁵⁶）に合わせ、**知財戦略も進化・深化すると予測**されます。現状維持ではなく、新規事業の特性に即した戦略転換が求められるでしょう。以下、考えられる方向性を挙げます。

- ・**プラットフォーム特許戦略の重視**: 再生医療や創薬プラットフォームにおいて、**基盤技術の特許取得**をより一層推進するとみられます。例えば、間葉系幹細胞の培養方法・培地組成、細胞投与デバイス、遺伝子解析手法など、個々の製品を超えた「土台」となる技術を**包括的に特許網でカバー**する戦略です。こうしたプラットフォーム特許は自社製品の独占を守るだけでなく、他社へのライセンス提供による収益化も視野に入ります。実際、再生医療安全性確保法施行後に他機関からのMSC培養受託を開始した際も、ロート製薬は高品質培養技術を確立し特許で保護した経緯があります²⁴。今後はこれをさらに推し進め、**複数疾患に横展開可能なコア技術**を特許群でがんじがらめにする戦略が予想されます。
- ・**グローバル知財出願・権利化の加速**: メディカル事業はグローバル市場が相手となるため、各国での特許・商標取得が不可欠です。ロート製薬も統合報告書で「グローバルな知財力の強化に取り組む」と明言しており⁵、今後は**主要市場での特許出願件数の増加**が見込まれます。具体的には、米国・欧州・中国などでPCT出願や現地出願を積極化し、自社パイプライン（例えばADR-002KやTLM-003等）の国際特許網を整備すると考えられます。また、海外拠点に**知財専門人材を配置**し、各国代理人との連携強化や現地の知財法制に対応した戦略立案を行うでしょう⁵¹。このグローバル展開により、国内外での知財ポートフォリオを最適化し、将来の模倣品や特許クリアランスリスクに備えるものと思われるでしょう。
- ・**バイオ系知財への対応強化**: 再生医療・バイオ医薬ならではの知財課題にも本腰を入れる必要があります。例えば、細胞治療は特許だけで守り切れない場合に**データ独占期間**（薬事規制による審査データ保護）を活用したり、製造プロセス上の**ノウハウ**を企業秘密として管理したりする戦略が重要です。ロート製薬もこの点を認識して、**知財戦略と薬事戦略の一体化**を図るでしょう。具体的には、承

認申請時期に合わせた特許出願計画（特許期間の延長も視野に）、オーファンドラッグ指定による市場独占期間の活用検討、さらにはバイオシミュレーや後発企業への**特許訴訟辞さない構え**の醸成などが挙げられます。また、バイオ領域では特許クレームの書き方一つで有効範囲が変わるため、専門知識を持つ**バイオ特許人材の育成・採用**も進むでしょう。知財部門内に分子生物学や再生医療に明るいスタッフを増強し、社内発明の掘り起こしから他社特許動向調査まで高度化していくと予想されます

21。

・**知財と経営戦略の一層の融合**：新規メディカル事業では研究開発投資額も大きくリスクも高いため、**知財戦略が事業成否を左右する比重**が増します。そこで、経営陣が知財の重要性をこれまで以上に発信・共有し、全社的に知財マインドを底上げする取り組みが継続されるでしょう⁵¹。例えば、新製品立ち上げ時の知財クリアランスや特許出願計画を経営会議で審議する、知財リスクや機会を定量的に評価して投資判断に組み込む、といった**知財経営の実践**が進むと思われます。また社内の発明報奨や知財教育を拡充し、研究者・開発者が早期から知財を意識してプロジェクトを進める文化を醸成するでしょう。こうした取り組みにより、知財戦略と事業戦略の真の統合（Integrated Strategy）が実現すれば、競合他社に対する優位性は一層高まります。

・**知財ミックスの継続と拡大**：コンシューマー分野で磨いてきた**特許・意匠・商標のミックス戦略**も、メディカル分野で応用が考えられます。例えば再生医療製品の商標戦略（患者や医師に浸透するブランド名の構築）や、デバイス類の意匠権取得（例：細胞投与シリンジのデザイン保護）などです。特に医療機器やコンビネーション製品では形状・UIの工夫が競争力になるため、**デザイン思考×知財**は引き続き重要です⁴⁹。ロート製薬は意匠活用の社内ノウハウもあるため、新規医療デバイスで積極的に意匠権を取得し他社の模倣を牽制するでしょう。また商標についても、「ロート」という企業ブランド信頼を活かしつつ、新規治療分野ごとにブランド展開する戦略が考えられます（例えば再生医療関連サービス名にロートの冠を付す等）。商標面のグローバル出願も同時並行で進め、将来の国際展開に備えると思われます。

まとめ：ロート製薬の知財戦略は、メディカル事業拡大に伴い**守りから攻めへ、国内からグローバルへ**と軸足を移しつつあります。現状でも知財は経営の重要要素ですが、今後はさらにその傾向が強まり、知財部門の役割は**権利の護り手から事業の戦略的パートナー**へと深化するでしょう。知財投資も増加し、新薬創出や事業モデル転換を下支えする形で経営に貢献すると期待されます。一方で、大手競合との知財戦で勝ち抜くにはリソース不足というハンデもあります。したがって引き続き**オープンイノベーション**を巧みに活用し、外部の力も借りながら自社知財の価値最大化を図る戦略が取られるでしょう。統合報告書2023でも「知財を重要な経営資源と位置づけ、持続的成長に導くため最適なポートフォリオを戦略的に構築していく」と明記されています⁵⁵⁷。この方針のもと、ロート製薬の知財戦略は現状の延長線上で**さらなる進化**を遂げると考えられます。すなわち「**知財経営の高度化**」こそが、メディカル事業で高リスク・高リターンに挑むロート製薬にとって、今後の成長を支える鍵となるでしょう。

出典：ロート製薬公式サイト、統合報告書2023、知財活動紹介資料、特許公開データベース、競合企業情報など¹⁴⁷²³³¹³²⁴⁶。

¹ ² ³⁶ ³⁷ ³⁸ 知的財産活動 | 研究開発 | ロート製薬株式会社

<https://www.rohto.co.jp/research/intellectual-property/>

³ ⁴ ¹³ yorozuipsc.com

<https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/1d8e99152e5000562897.pdf>

⁵ ¹⁰ ¹⁶ ¹⁷ ¹⁸ ⁴⁰ ⁴⁷ ⁴⁸ ⁵³ ⁵⁷ ROHTO Well-being Report 2023：閲覧用

https://rohtocdnst01-atbadkejf9c6hgaf.a03.azurefd.net/cojp/IR/Well-being_Report/2023/sp_m_ns_web_0906187892309.pdf?v4

6 23 28 ロート製薬株式会社の特許出願公開一覧 2018年

<https://ipforce.jp/applicant-3211/2018/publication>

7 ロート製薬株式会社の特許出願公開一覧 2023年

<https://ipforce.jp/applicant-3211/2023/publication>

8 30 ロート製薬株式会社の特許出願公開一覧 2022年

<https://ipforce.jp/applicant-3211/2022/publication>

9 ロート製薬株式会社の特許出願公開一覧 2020年

<https://ipforce.jp/applicant-3211/2020/publication>

11 12 kantei.go.jp

https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/tyousakai/tousi_kentokai/dai23/siryou5.pdf

14 15 19 20 21 39 45 51 52 55 ロート製薬の知的財産活用レベル

<https://yoroziupsc.com/blog/6482367>

22 24 26 27 41 56 ロート製薬のメディカル事業への積極投資と戦略.pdf

<file:///file-2ZeYWz2owepmZCWhYD5EGK>

25 54 ロート製薬株式会社の特許出願公開一覧

<https://ipforce.jp/applicant-3211/publication>

29 ロート製薬株式会社の特許出願公開一覧 2024年

<https://ipforce.jp/applicant-3211/2024/publication>

31 42 pdf.irpocket.com

<https://pdf.irpocket.com/C4576/WYlc/kb3k/EfUX.pdf>

32 33 34 新型コロナウイルス感染症の治療薬候補物質に関するバイオメティクスシンポジーズとのライセンス契約および研究開発組織「RB+」について | 研究開発 | ロート製薬株式会社

https://www.rohto.co.jp/research/researchnews/technologyrelease/2021/0414_01/

35 音声バイオマーカー技術に強みのPST株式会社と資本業務提携を締結

https://www.rohto.co.jp/news/release/2025/0219_01/

43 ロート製薬がシンガポールの漢方薬製造企業買収、三井物と 約880億円 | ロイター

<https://jp.reuters.com/markets/japan/funds/Y5ZWLIHKLJIMFHYVVDVCKFO24-2024-04-04/>

44 オーストリア医薬品・医療機器メーカーのモノケムファームを ...

<https://maonline.jp/news/20240606a>

46 ロート製薬、メディカル事業の深堀 Gemini.docx

<file:///file-M23kyCGjtHju1YzqwqYPcs>

49 50 『講座レポート』第2回「攻めと守りのブランディング～知的財産権の違いを理解し味方につける～」
| 一般財団法人 大阪デザインセンター

<https://www.osakadc.jp/seminar-event/6553/>